



検証●**盈進・東野高校にみるアレグザンダーの実験**

日本の現実とのズレ大きく、直営方式の

短工期で“完成”みたが、結果に設計者の不満残す

設計や施工の分業体制が固まっている今日、
大がかりなユーザー参加と直営方式により建物造りを行ったらどうなるのか。
パタン・ランゲージの大家、アレグザンダーの手になる^{えいしん}^{ひがしの}盈進学園東野高校は、
それを試みた野心的なプロジェクトだった。
短工期という悪条件下で一応の完成にこぎつけたものの、
日本の現実とのズレも建設過程の随所で目立った。
例えばユーザー参加に関するユーザー側の戸惑い、
短工期ゆえに協力を求めたゼネコンの請負とのせめぎ合い、などなど。
加えて出来あがった建物に対するアレグザンダーの不満も見逃せない。
いったいこれらの現実は何を物語るのか。
またアレグザンダーは今回のプロジェクトで何を試みようとしたのだろうか。
本誌はアレグザンダー、学園関係者らに取材し、
東野高校におけるキャンパス“実験”を検証してみた。

Ch. アレグザンダー (Christopher Alexander) の指弾 (しだん) を待つまでもなく近代の建設技術の進歩は、人間と建物とのかかわりを縁遠いものにしてしまった。例えば技術の専門化は、建築家、ゼネコン、下請けという職能の分業化を生む。さらに大量生産に伴う規格化、工場生産化も、人間と建物の実体との関係を希薄なものにした。

この分断した人間と建物のコミュニケーション・システムの復権を目指した動きの中でも、アレグザンダーの活動は、より包括的、より体系的なもので他に例を見ない。建物のユーザーの計画への参加、ユーザーと設計者の直営による施工を軸とする同氏の理論は、ユーザー、設計者、施工者、さらには社会一般の人々に、近代の建築生産体

制、あるいは建築そのもののあり方に対する、重大な問題提起を行ってきた。

反近代はアーキテクトビルダーが担う
アレグザンダーは、自ら主宰するセンター・フォー・エンバイロメンタル・ストラクチュア (Center for Environmental Structure, 本記事中では以下、CES と略称) の発刊するシリーズ第4巻「アーキテクトビルダー」で、次のように述べている。

「新しい建設プロセスの最初のバックボーンとなるのは、ある新しい種類の職業であり、これは、現在の建築家に属している機能とコンストラクター (施工者) に属している機能の両面を備えた職能人である」(「群居」2, セルフ・ビルドの世界, 1983年7月)。この

職能を「アーキテクトビルダー」と呼び、「一言でいうと、近代における中世のマスタービルダーに相当する」と。

続けて「アーキテクトビルダーは、行われるプロセスの最初から最後まで責任がある。そのプロセスとは、人々が参加して住宅を生産するものである。よって家族たちは自分たちの家を創造して喜びを得ることができる。このプロセスは単なる最終地点 (つまり生産物) に到達するための手段ではなく、それ自体が素晴らしいのである。自分たちが形づくっている住宅やその建設自体の中に、自らの『心』を産み出していく命のこもったプロセスであることを意味している」(同書) とも。

いったいアーキテクトビルダーは、現実に存在しうるのだろうか。アレグザンダーはこの実証を兼ねて盈進学園東野高校 (埼玉県・入間市) の建設に携わった。「この学園にふさわしい環境を造ろうとした。そして、これが当たり前の道と考えた」と語る同学園の細井久栄常務理事の全面的な支援があつて、初めて実現したものだ (本誌1982年7月5日号参照)。以下、建設プロセスを順を追って見ていこう。

教諭を面接、パタン・ランゲージ開始

今回のプロジェクトでも、ユーザー参加が重要なテーマとして掲げられスタートした。建物ユーザーである学校

(写真：三島 毅)

難しと露呈

側は、教学チーム、施設チーム、大学チームの3チームからなるプロジェクトチームで対応する。

ユーザー参加による最初の作業は、計画建物の状態を記述するパタン・ランゲージの作成である。

昭和57年の春、アレグザンダーが盈進学園計画着手のため来日した時、事務手続き、学内見学と同時に最初の面接が行われる。この時は、プロジェクトチームを中心とした面接を行い、パタン・ランゲージ第1次案を作成する。これはまだ4、5枚のレポートであり、概要を記したものだ。

次の段階は、教諭全員と一部生徒、ひとりずつの面接である。これにより、パタン・ランゲージ第2次案が作成された。

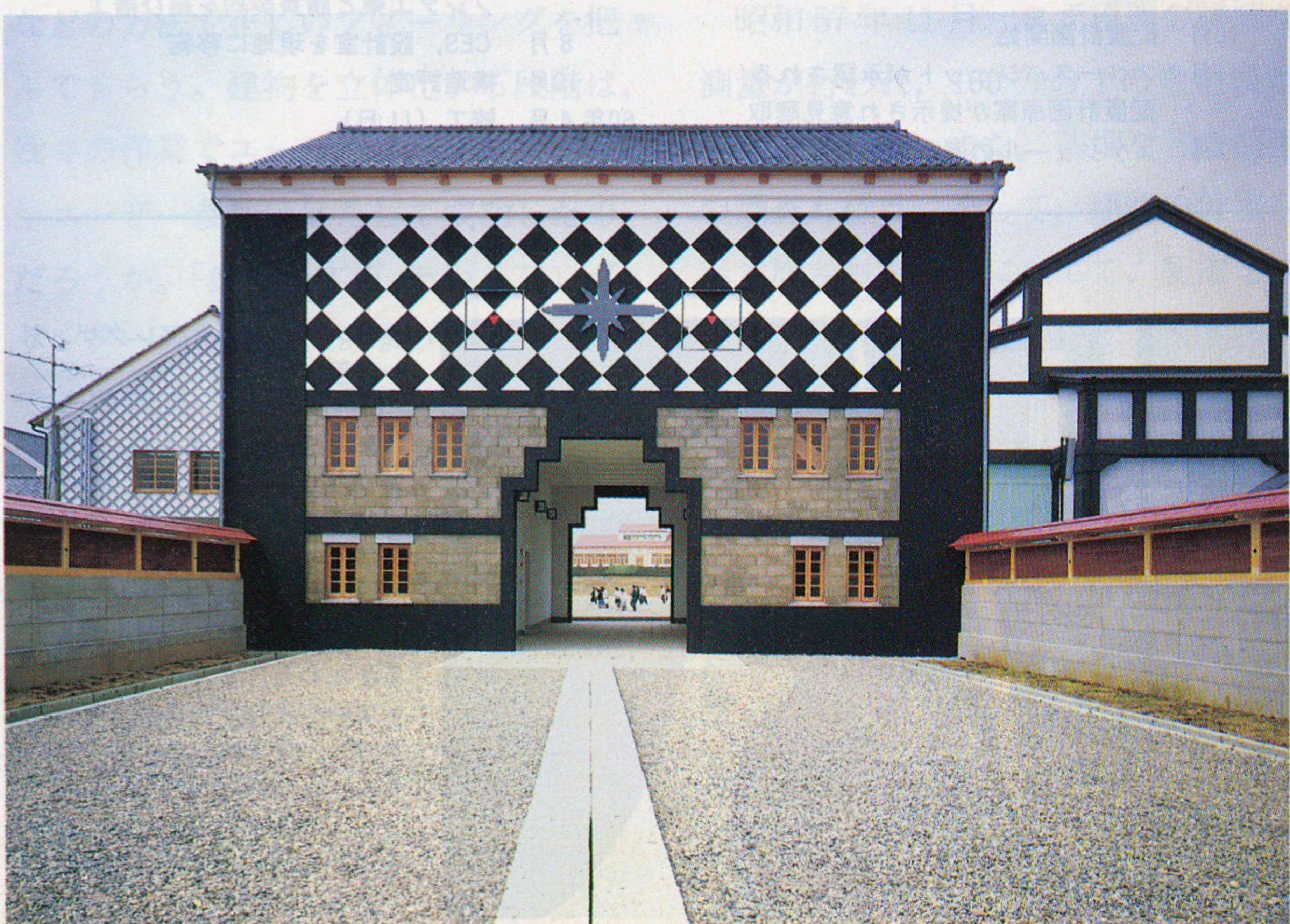
この2次案について、CESとプロジェクトチームで討議を重ね、多少の修正を加えたものが、パタン・ランゲージ第3次案（最終案）である。この最終案は200項目にわたる記述と、いくつかの挿絵（さしえ）で構成されたもので、盈進学園の全職員で討議され、9月半ばにほぼ、そのまま承認された。

素人には分からない部分も多い

この面接の目的について、CESのハンスヨアヒム・ナイスはこう説明する。「教諭に目を閉じてもらうなどして、意見の収集を行った。面接の目的は基本



メインアプローチは写真右上の第一の門から。左上は大講堂で、左下の赤い屋根の建物は体育館。中央に通りを挟んでホームルームが並ぶ。池は調整池も兼ねる



寺社の参道を思わせるアプローチ路を経て正門に至る。コンクリートブロック、木製建具、漆喰塗り、瓦葺き屋根など、特異な建物群の初まりにふさわしい正門である

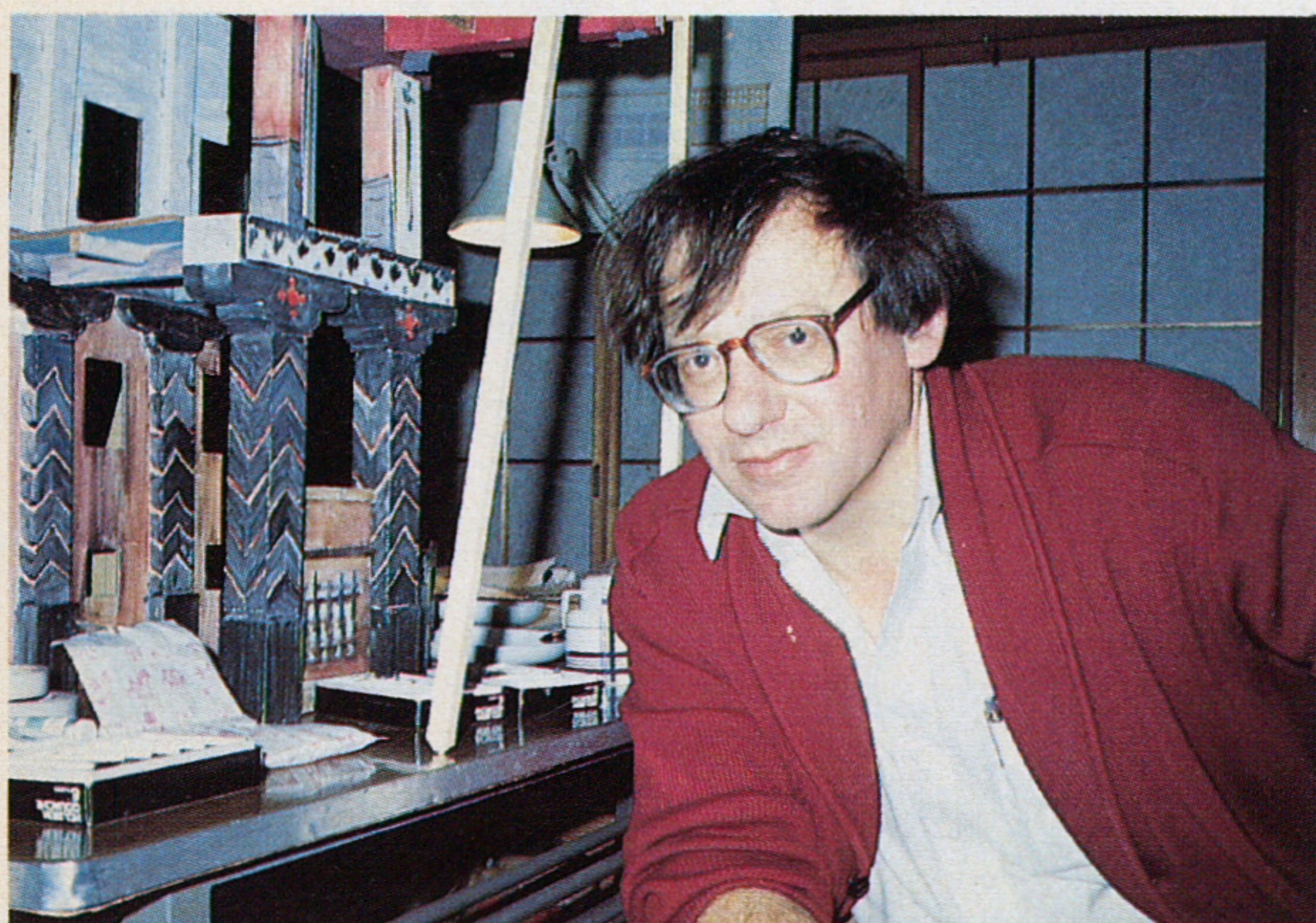


特別教室と教室棟に挟まれた路地的な空間。右側のアーケードは奥に行くと、地形に従い下がっていく

● 盈進学園計画の経緯

昭和

57年 3月	プロジェクトチーム（学校側）発足	58年 2月	のゼネコンにヒヤリング 基本設計開始
4月	アレグザンダー来日。プロジェクトチームとの面接、学内見学、5月には設計契約を行う	5月	配置計画決定。移転先の敷地を公表し、現地見学会を行う フジタ工業と覚書を結ぶ。
5月	パタン・ランゲージ第1次案 ナイス、キングが来日し、全教諭との面接開始	7月	詳細設計開始
6月	パタン・ランゲージ第2次案 2次案についての学内の意見集め	9月	農地転用許可
8月	プロジェクトチーム集中討議	11月	地鎮祭、造成工事開始
9月	パタン・ランゲージ第3次案 合同職員会で承認（意見併記） スペースバジェット（施設規模の検討）開始	59年 1月	工程計画発表
10月	配置計画開始	3月	内部設計のための面接開始
11月	スペースバジェットが承認される 配置計画原案が提示され意見聴取	4月	埼玉県私学設置審議会で設置願が留保
12月	スケジュールの遅れが心配され、複数	5月	建築確認
		7月	高校設置承認 フジタ工業と請負契約を結び着工
		8月	CES、設計室を現地に移転
		10月	構造評定
		60年 4月	竣工（11日） 開校（14日）



昭和60年2月16日。現地事務所で、大講堂内部の色彩計画を練る。左がその模型。大講堂内部は未完成で、この色彩は塗られていない

クリストファー・アレグザンダー略歴

1936年ウィーン生まれ。英国ケンブリッジ大学で数学のMA、次いで建築のBA取得。その後、米国ハーバード大学で建築のPh.D.をとる。現在、カリフォルニア大学バークレーで教鞭をとるかたわら、センター・フォー・エンバイロメンタル・ストラクチュア（CES）主宰。「The Timeless Way of Building」、「パタン・ランゲージ」、「オレゴン大学の実験」など、多数の著作がある

的には、イメージの源泉となるものの発見と教諭の本当の考えや希望の発見にある」（SD誌1985年3月号）。

面接に立ち会った盈進学園の野寺陽彦（あきひこ）教諭は当時の様子をこう語る。「面接はCESのナイスと（イングリッド・）キングが行い、中埜博氏が通訳した。その前に先生方がひとりずつ座り面接を受ける。あまり話さない人もいたり、昔の建物が頭にあり、それを話す人も多かった。素人には分からない部分も多い、CESを信頼して任せたという感じだ。積極的に我々の意向をくんでくれているのだろうと考えていた」と。

英語と日本語という言葉の違いもあり、設計者とユーザーたちの間で、十分なコミュニケーションが図られたのかどうか、心もとない証言である。

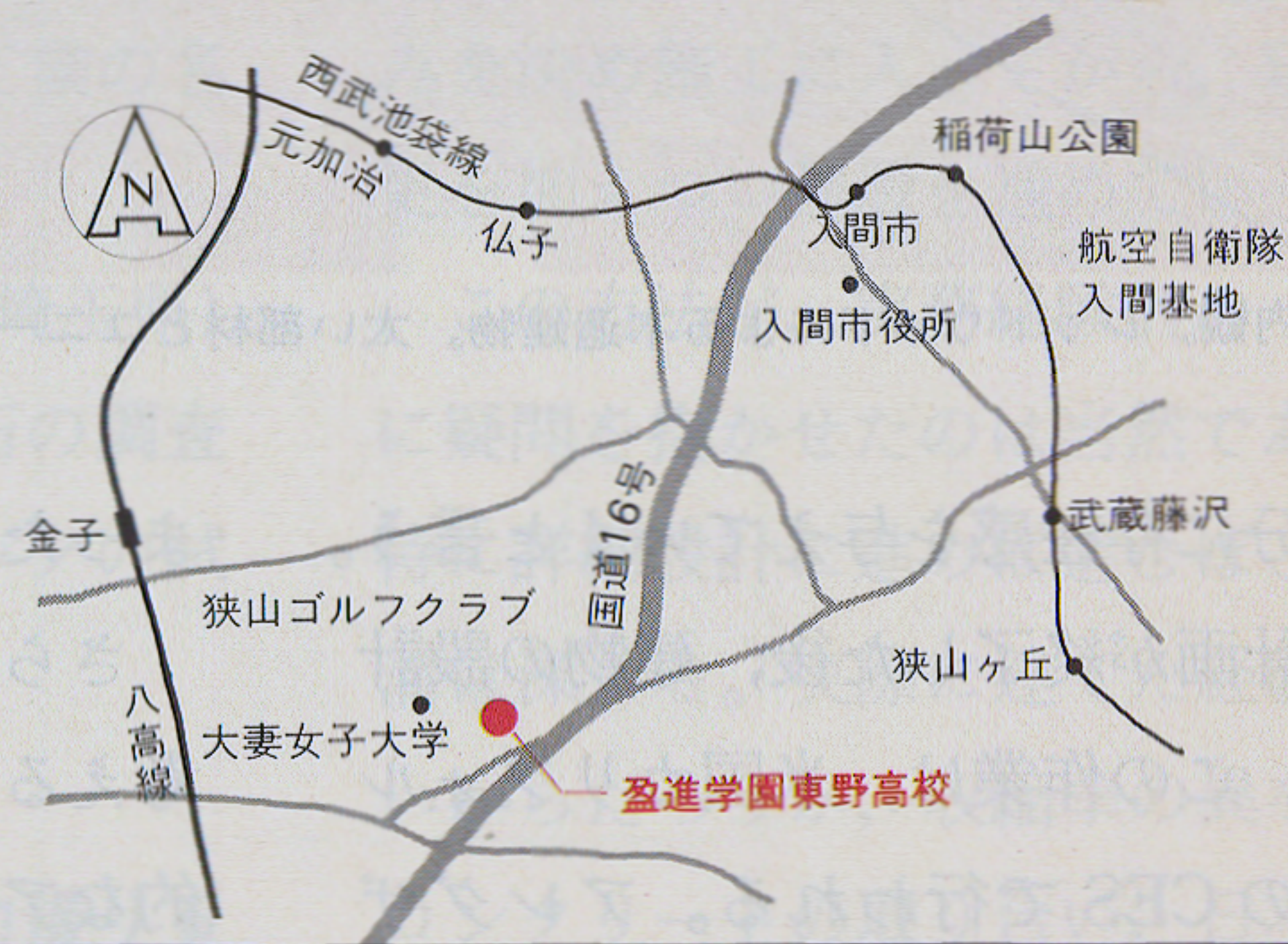
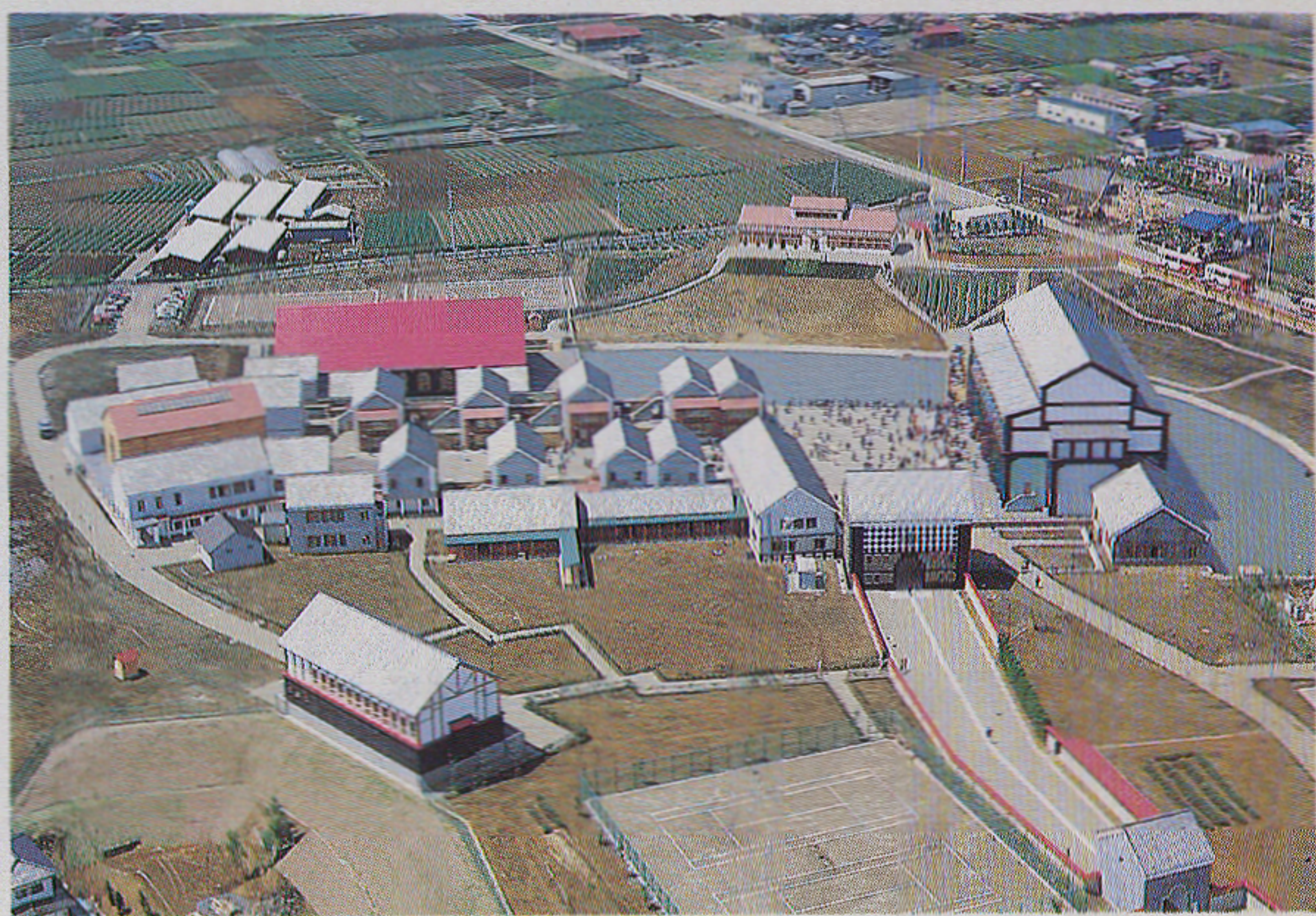
床面積の配分を行う、次のスペース・バジェットの段階では、一転して教諭の間で大いに議論が行われたという。面接時とはうってかわり対照的だ。

ユーザーとの討議で設計を進める

57年の末には、配置図が学校側に示される。「パタン・ランゲージでは、現実にならなっているかが分からなかった。配置図として絵に描かれたものを見て、初めて具体的なイメージが沸いてきた」とは、野寺氏の率直な感想だ。

この配置図をもとに、学校側が教諭、職員に対し意見聴取を行う。現在の食堂の位置にあった音楽室が大講堂に付属し、小体育館も現在の位置に修正されたのは、こうしたヒアリングの結果である。

アレグザンダーは、単なる機能的な理由で変更することにはこだわった。これとは別にアレグザンダー自身にも不満があったらしく、後で多目的ホールを追加している。



58年に入り基本設計が開始される。学校側は各建物に担当者を決め、細かな調整を行う。教室が小さ過ぎないか、体育館の寸法比は、などの平面計画が主な議題となった。当時の状況はといえば、「形にするのは設計者の仕事と割り切っていたが、彼らの方法では、何か決まっても、またすぐ変わっていく」（野寺氏）というような有様だった。

この後、詳細設計、現場での打ち合わせにも担当者が参加する。しかし、「機能とか便利さはあまり追求しない」という学校側の方針もあり、設計作業はほぼ設計者側に一任された形で進んでいく。

建物を立体化するのは設計者の仕事

盈進学園計画でのユーザー参加について、アレグザンダーはこう説明する。

「ユーザー参加は二つのレベルで行われた。ひとつはパタン・ランゲージであり、もうひとつは平面計画の時

ある。パタン・ランゲージは単純なユーザーサーベイではない。感情の本質を造り上げているものを掌握するのが狙いで、それ自体が構造を持つ。また、平面計画では、ユーザーのグループごとに、討議する。基本的な形状が得られた時、棒と糸で実際の大きさを示すなどの方法で正しいフィーリングを掴んでもらう。建物を立体化する段階は、我々の作業でユーザーは参加しない」。

ユーザー参加は果たして成功したのだろうか。「感情の本質」というアレグザンダーの言葉は、あまりにも抽象的でその成果の判断は難しいが、ユーザーの立場である教諭たちの消極的ともいえる姿勢は正直言って気になる。利便性、性能という視点を失ったときの近代人の弱さであろうか。アレグザンダー側に立てば、これこそ、アーキテクトビルダーが、さらに戦うべき“近代”の一側面であったのではないだろうか。

現地で配置計画、設計には模型を多用

ここで、アレグザンダーの具体的な設計作業に目を移してみよう。

パタン・ランゲージにより具体的な建物内容と規模が決まってから、配置計画を行う。抽象的なパタン・ランゲージを現実の敷地に当てはめるわけだ。

昭和57年11月、まず現地の詳細な測量が行われ、100分の1の敷地模型が作成される。また、茶畑などの植生の調査も行う。そして、建物の位置を示す旗ざおを実際に立てて、配置を検討し、その位置を模型上でチェックする。この作業は数カ月にもおよび、何十回と繰り返された。

この過程で、アレグザンダーは、センターリング・プロセスと呼ぶ原理を強調する。すべての設計、施工の各ステップでの行為は、ある中心を造る作業であり、前のステップでの中心を生かしながら進めていくプロセスが重要で、このプロセスが、形に力を与え、



体育館の内観。レッドウッドによる木造建物。太い部材とユニークな架構には迫力がある



体育館の外観。木製の建具と黒い塗り壁に、赤い鉄板葺きの屋根が印象的だ

部分部分に存在感を与えていくと言う。

配置計画が終了した後、建物の設計に移る。この作業は、米国カリフォルニア州のCESで行われる。アレグザンダーの設計は、模型による検討が特徴的だ。「まず、100分の1の模型で空間、ボリュームをチェックする。次に、50分の1の模型を用いて、窓、階段、また色、形の検討を行う。これらはボール紙で作られたラフなもので、事務所が模型で一杯になるぐらい数多く制作した」と、アレグザンダーは語っている。「図面では人間の細かな感情を伝達できない。切ったり、のりで張ったりして徐々に模型を作ることは、そのまま建物を造ることにつながる」というのが、その理由だ。

構造、施工も考慮しリアリティ実現を

また、設計作業のある段階で施工法も検討し、コストのチェックを行うという。アレグザンダーは、「CESは工務店でもあるので、低コストと建物の調和を考え、新しい工法を開発している。今回もワイヤーを格子状に組んで、吹き付けコンクリートで固める工法を考えたが、確認申請のとき変更されてし

まった」としている。

さらに構造もアレグザンダー自らが考える。「我々は構造家でもある。構造的なアイデアを3次元モデルとして有限要素法で動的解析を行っている」と言う。今回のプロジェクトでは、ユニークな木造トラスによる体育館、多目的ホール、武道場の3棟が日本建築センターの評定を受けた。「三つの建物は構造を第一と考えているとの印象を強く受けた。彼は力の流れをすべて理解している」とは、審査を担当した坂本功・東京大学助教授の感想である。

アレグザンダーは、「変更していくプロセス、多方面からのアプローチが建物にリアリティを与える」と語る。建物に対する貪欲なまでの取り組み、トータルな理解がアーキテクトビルダーの条件と言えようか。

アーキテクトビルダーを自認するアレグザンダーの建物への興味は、古くからある伝統的な材料、工法にあるようだ。「アレグザンダーは、伝統的な技術を尊重する。棟梁の住吉（寅七）さんには敬意をもって接していた。また、昔の人のやっていたものは、合理的という考えを持っているようだ」とは、

建築センターの評定資料を作成した松井源吾・早稲田大学教授の話である。

しかし、施工や構造計画への関心の強さとは対照的に、法制度上の手続きとか設備計画などにはあまり興味がないのか無頓着であった。

まず法手続きだが、今回も、三つの主な課題があった。農地転用、学校設置、建築確認に関するものだ。これらの問題に対し、アレグザンダーはあまりに無防備であったといえる。実際の作業は日本側のスタッフに任せられ、設計は米国で別に進行する。法手続きの遅れは、工期を圧迫し、最終的にはゼネコンの参画を招くことにつながった。

もうひとつは体育館に露出された設備配線があげられる。これは何を意味するのか。細かなこととはいえ、アレグザンダーの設備に対する無関心さを示すものではないか。これらの事柄への理解は、全能なアーキテクトビルダーの要件と思われるのだが……。

深みのある情緒の実現に直営は不可欠

ここでアレグザンダーにとって当初からの重要な課題であった施工方式の問題に立ち入ってみよう。

いわく、「最も重要なポイントは、施工段階でいかにマネジメントを進めるか、そのやり方だと思う。というのは、建築の本当の価値はその建物が物理的に造られていく過程で具現されていくものだからだ。良くできた建築は、設計と施工が不離一体の関係を保っている」(本誌1982年7月5日号参照)

アレグザンダーの目指す理想は、こうした証言からもうかがえるようにアーキテクトビルダーだ。ユーザーと一緒に現場でひとつひとつの部分について決定していく。そうすることで、ユーザーの微妙な個性を生かし、細部までゆき届いた人間的で暖かい個性的なものを造ることができるのである。アレグザンダーはこれを“ディープ・フィーリング(深みのある情緒)”という言葉で説明する。これが建物にリアリティをもたらすという。この実現には、直営と言う、ユーザーと設計者による設計施工一貫体制が不可欠な要件となる。

アレグザンダーは、この計画着手以来、直営工事を行う体制を組織するため、細井氏とともに多方面に協力を打診する。しかし、日本の現状ではこれはかなり難しかった。一方で、表面化する法手続きなどのスケジュールの遅れ。計画着手から半年過ぎた昭和57年末には、大手ゼネコンのヒヤリングを行う。「安全弁と考えた。ゼネコンの下請けのネットワークを用いることで、直営を行う意図であった」と、細井氏は説明する。ここで、フジタ工業の名が上がってくる。

これ以降も半年間程、川越(埼玉県)の漆喰職人を訪ねたり、大谷石の調査をしたり、あるいは瓦やブロックの試作を行い、直営を模索する。

窮余の一策としてゼネコンの力借りる

これと並行して、米国のCESで基本設計が進み建物概要が決まる。58年5月頃には配置計画が固まり、敷地が公表される。この頃、細井氏から依頼

を受け、小田切一生(はじめ)氏(小田切一生建築研究室代表)が、CESの日本側協力スタッフに加わる。許認可申請に関しての協力を受けるという、フジタ工業とのスポンサーシップ(覚書)を取り交わしたのもこの頃だ。

7月には基本設計が終了する。この基本設計、「建物の枠組みのみで、窓とかドアの位置などは決めていない」(野寺氏)といったものである。アレグザンダーの建設方法では、設計で概略のみを決め施工に入ってから、現場で変更を加えつつ建設を進めていくからだ。

この方法が、実務経験者の小田切氏に疑問を抱かせたのは当然であった。特に詳細設計に進めば進むほど、その溝は深まる。「実際に建てた経験が少ないからだろうが、収縮率の異なる木とコンクリートの取り合い、日本の風土を無視した浅い庇とその下の木製建具、武道場の硬過ぎる床組みなど、我々には理解できないことだらけだった。近代否定のあまり、不必要なものまで捨

(資料提供: CES JAPAN)

● 盈進学園東野高校パタン・ランゲージ

- | | | |
|-----------|--------------|-------------|
| 1章 全体的特徴 | 4章 内境内の通り | 7章 特別な外部詳細 |
| 2章 内境内 | 5章 外境内 | 8章 建物の内装の特徴 |
| 3章 内境内の建物 | 6章 主要建築の内部構造 | |

——1章より2章までのまとめ——

1. 全体的特徴

- ①石の土台塀、木の柱、白い壁、2、3カ所特別な所に朱色の漆材、深々とひさしをのぼす屋根、濃い地味な屋根の色、地面の石や草が敷地を特徴づけている。
- ②まず敷地を囲む外塀がある。
- ③外塀の内側に全敷地の約5分の1にあたる小さな面積を囲む内塀がある。
- ④内塀の内側の領域を「内境内」と呼ぶ。ここは、高校や大学の主要な建物建つ密度の高い領域である。
- ⑤内塀と外塀の間は「外境内」であり、庭園や運動場、そして、種々の独立して建つ、外建築がある。

2. 内境内

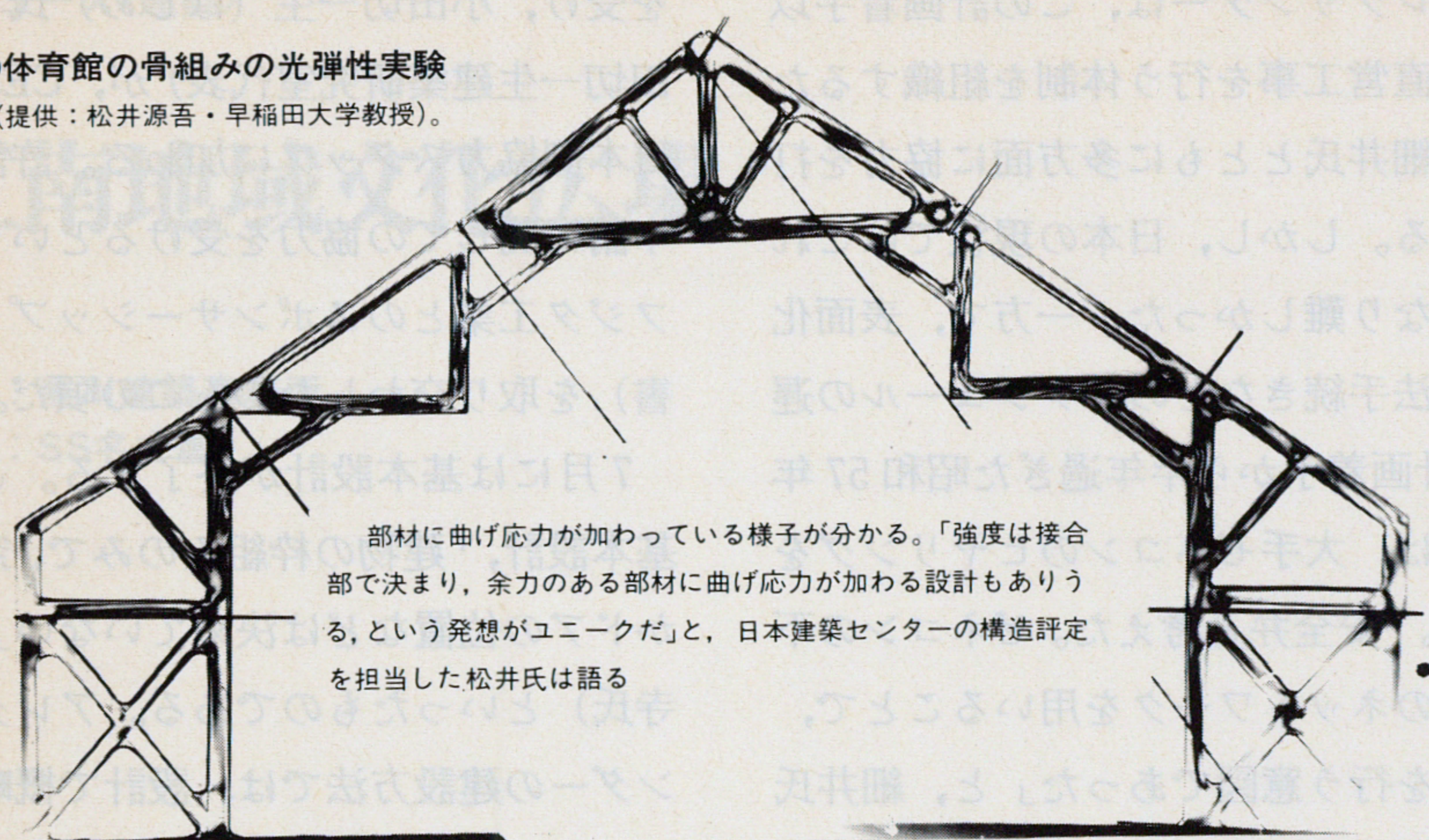
- ①内境内への入口は、外境界で始まる。外境界の重要なポイントに正門がある。
- ②この第一の門は建築物である。
- ③第一の門より内境内に向けて「玄関道」がある。玄関道の両側に壁か樹木が並び非常に静かである。
- ④「玄関道」が内境内と出会うところに第二の大きな門がある。これがメイン・ゲート(正門)である。
- ⑤正門の内側には中央広場がある。この広場は大講堂とともに構成され、その講堂の正面は庭に向かっている。
- ⑥中央広場の先に、そして第三の門を通り抜けると、ホームルーム通りがある。ホームルーム通りは、幅広く、活気のある、陽のあたる通りで、個々

のホームルーム教室建物群によって構成されている。

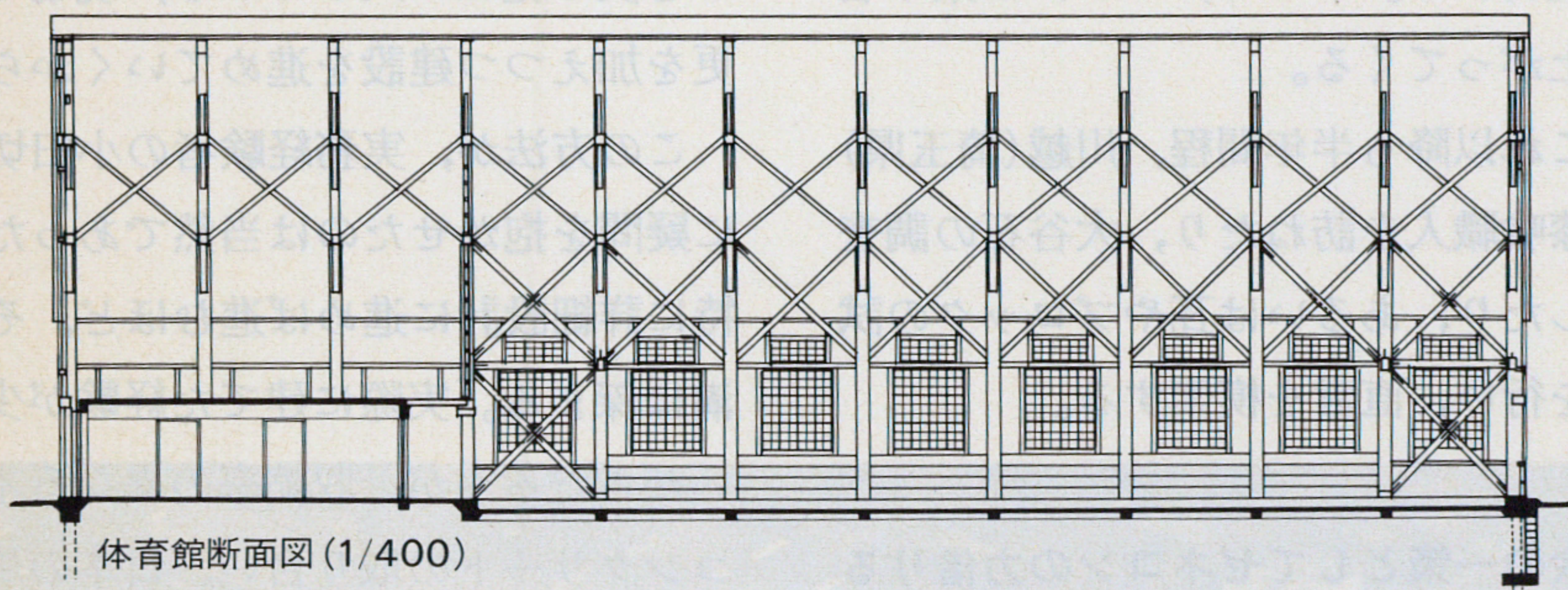
- ⑦ホームルーム通りの先に第四の門を通り抜けると高校と大学の最も大切な中心がある。この大切な中心は前にも述べてきたように幾重もの層を通り抜けて到達できる場である。そして、それ自体にもさらに重なり合いがありそれ以上の静けさがそこにある。
- ⑧この最も大切な中心は、かなり大きくて、それ自体一つの世界を形成している。内境内の内部にあって小道の門で区切られ、この中心は高校と大学の大部分を構成している。
- ⑨この最も大切な中心は唯一のものであり、同時に心臓部であり、高校と大学の交差するところであるから、二つの道が交差する十字形に近い形となる。漢字の「田」の字に似ているのでそれを我々は「田の字センター」と名づける。
- ⑩「田の字センター」を形成する通りと小径の交差する地点に小さい中心がある。この場所は、田の字センターのにぎやかな中心である。
- ⑪そして、田の字センターの先端は一段高い所で、また、最も平和な場所に向かっている——我々はこれを「大学回廊」と呼ぶ。これは大学の内なる聖域であり、全学で一番平和な場所である。静かに瞑想をしたくなる場所である。
- ⑫また、田の字センターより直接に枝別かれしているのは、ホームルーム通りである。ホームルーム通りは、高校生のクラスのある個々のホームルーム教室建物群によって構成されている、広くて活気のある陽の当る通りである。
- ⑬田の字センターの向い側の門を通り抜けた所に芝生がある。この芝生は特に大学生に使用されるが、大学の建物に囲まれており、真っすぐ、湖に至る。
- ⑭湖は、平和な憩いの場所である。

●体育館の骨組みの光弾性実験

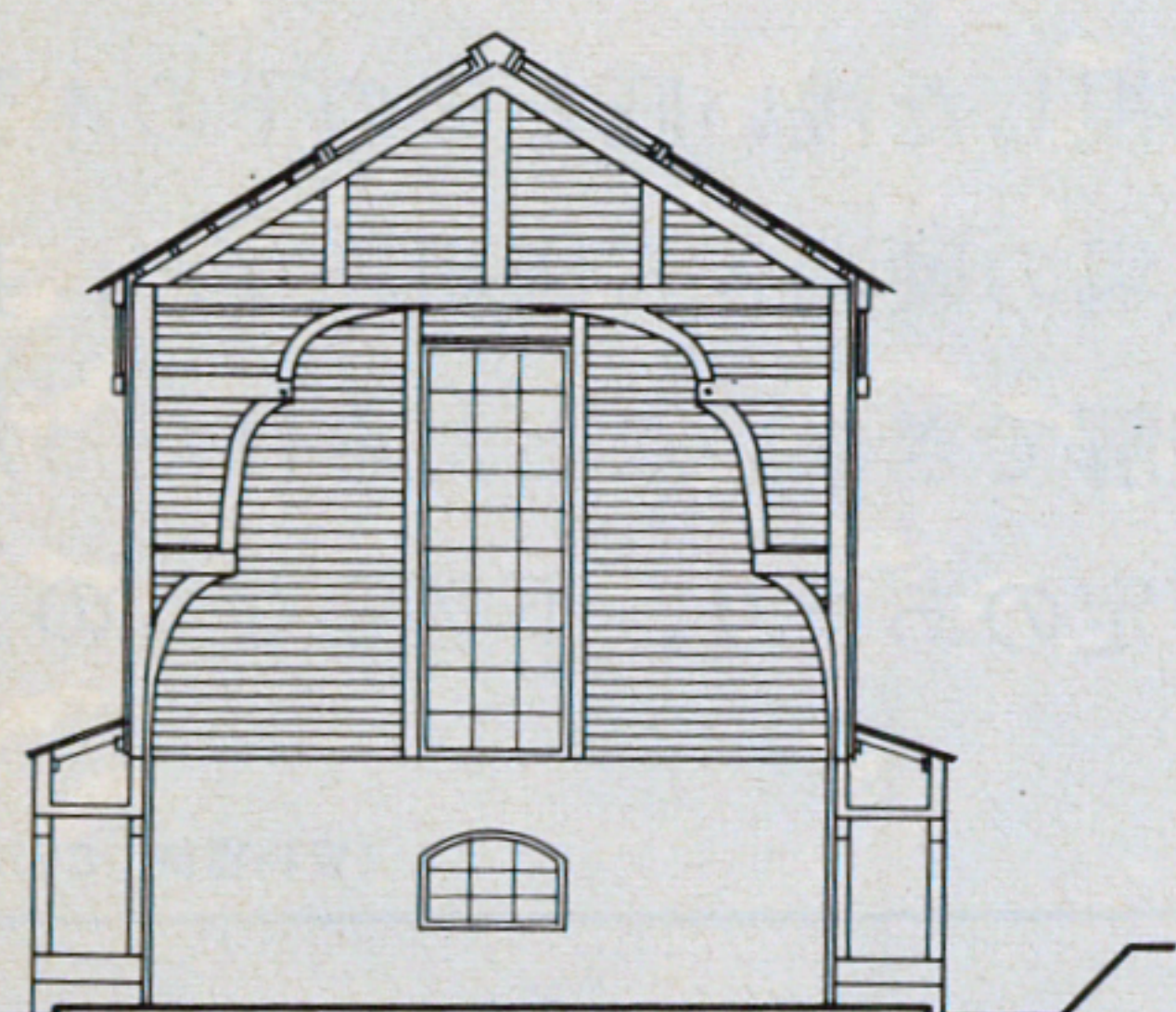
(提供：松井源吾・早稲田大学教授)。



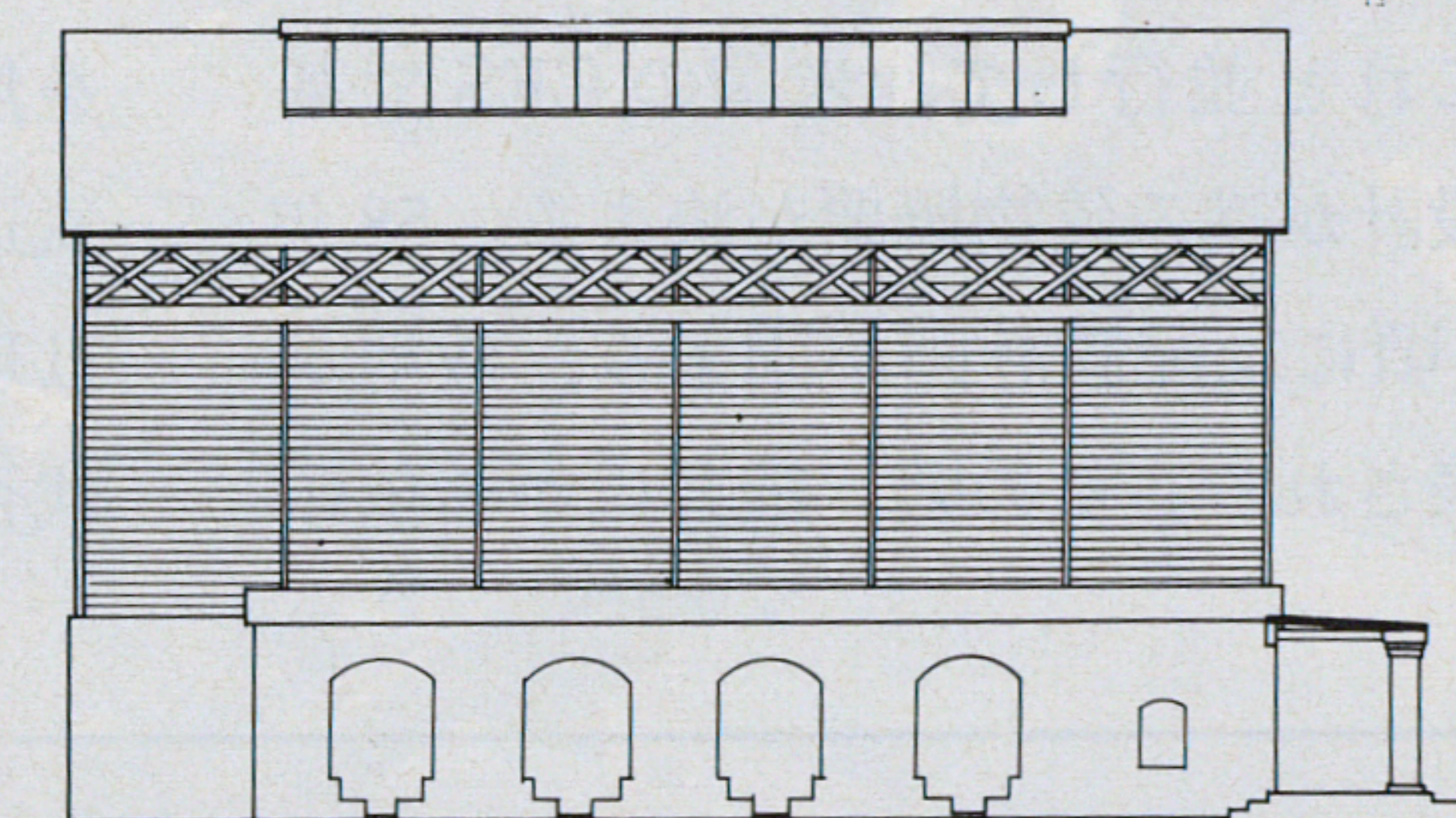
部材に曲げ応力が加わっている様子が分かる。「強度は接合部で決まり、余力のある部材に曲げ応力が加わる設計もありうる、という発想がユニークだ」と、日本建築センターの構造評定を担当した松井氏は語る



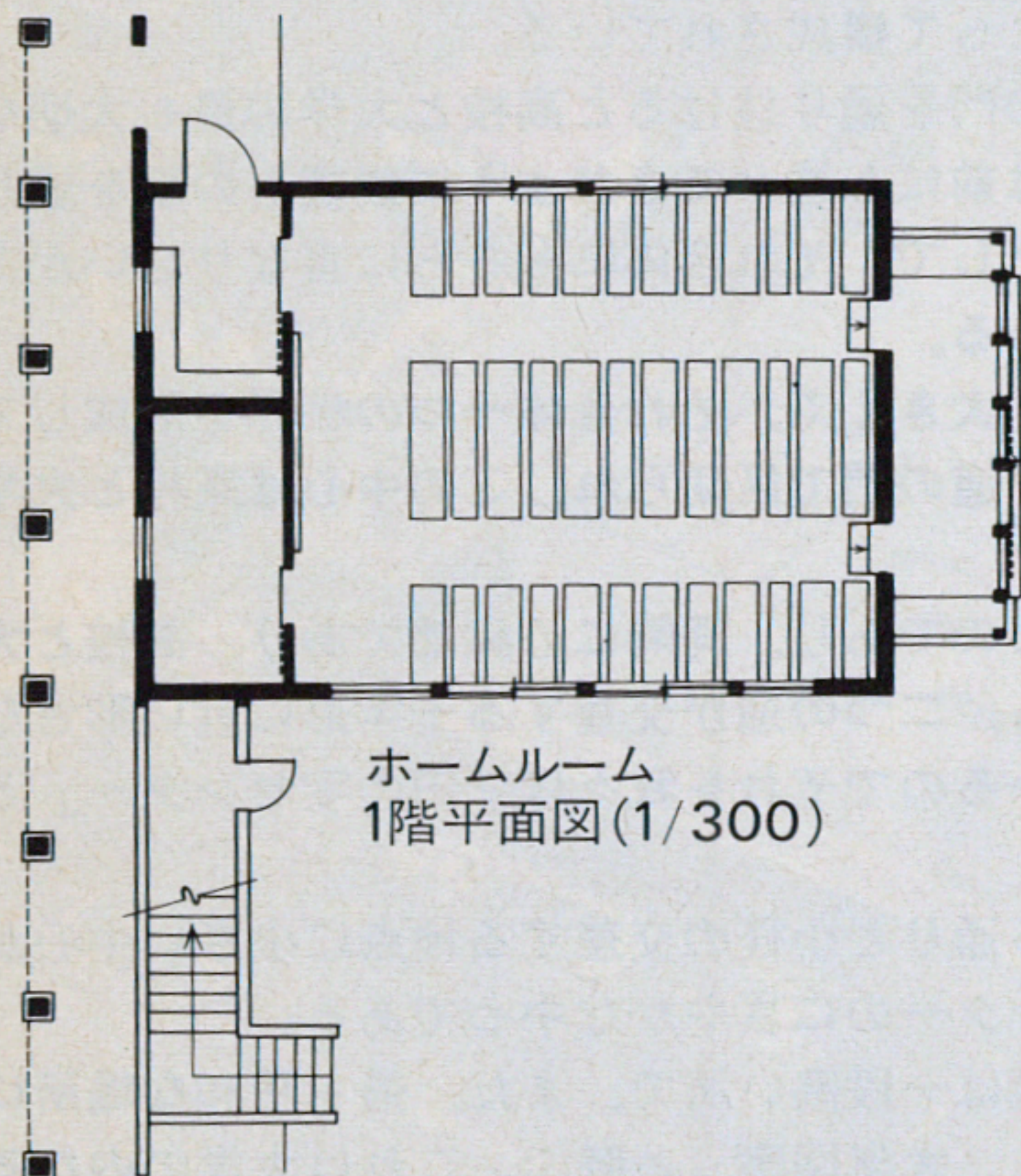
体育館断面図(1/400)



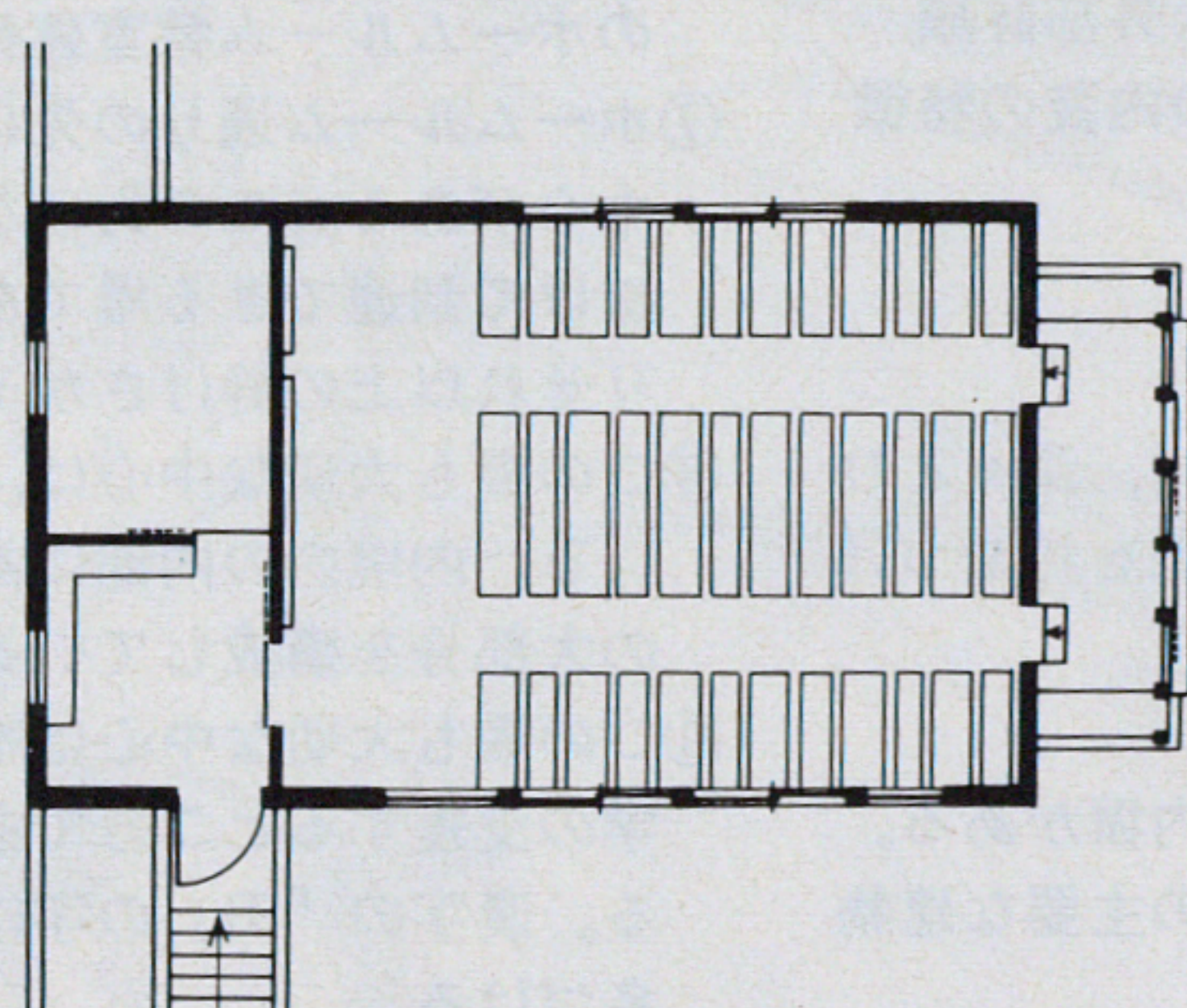
多目的ホール断面図(1/400)



多目的ホール西立面図(1/400)



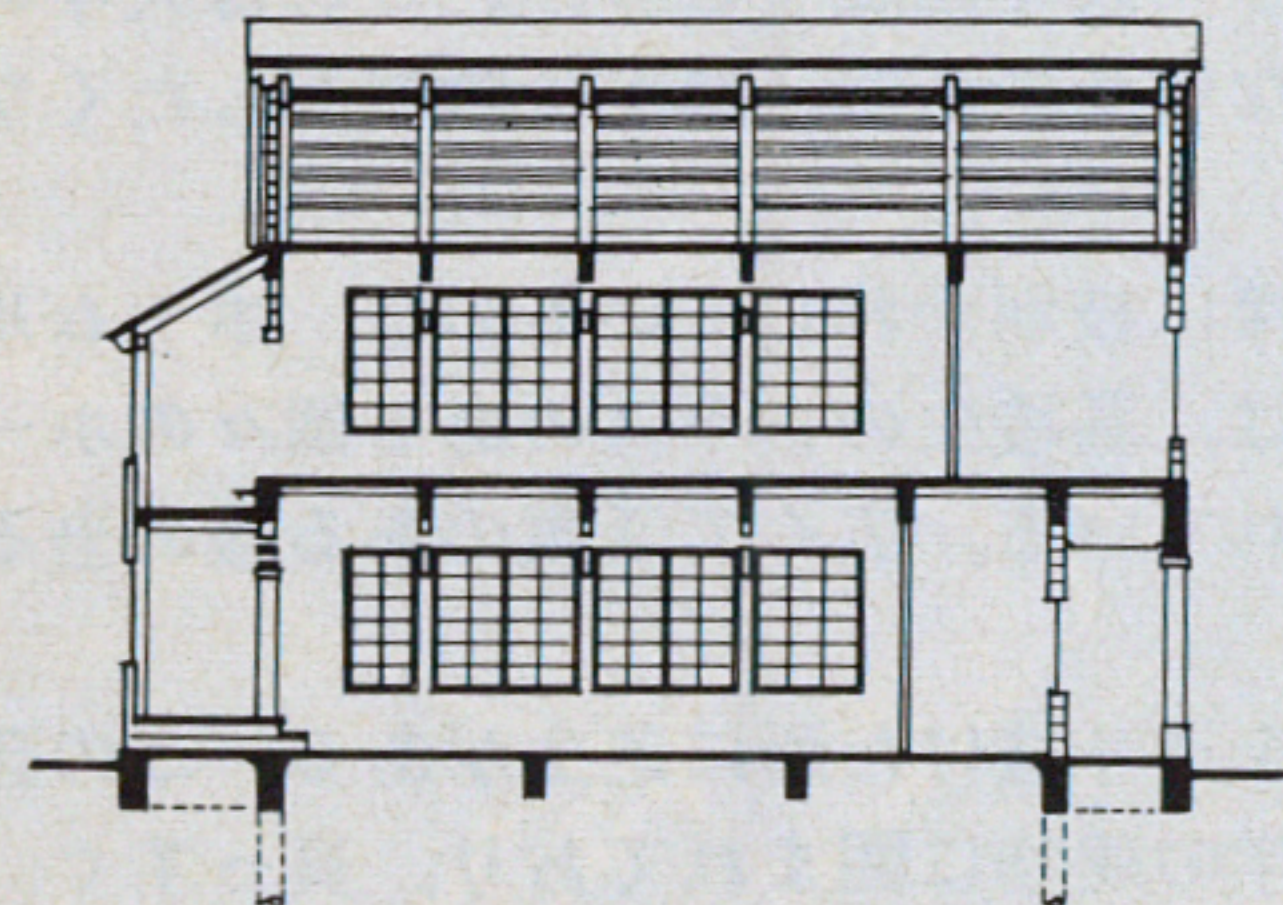
ホームルーム
1階平面図(1/300)



ホームルーム2階平面図

●建築概要

名称——盈進学園東野高校
所在地——埼玉県入間市二本木112-1
発注者——盈進学園
設計者——クリストファー・アレグザンダー、
センター・フォー・エンバイロメン
タル・ストラクチュア(略称CES)
施工者——フジタ工業
施工期間——昭和59年7月～60年4月
工費——22億4500万円
敷地面積——6万2127m²
延べ面積——9546m²



ホームルーム断面図(1/400)

象してしまっている」(小田切氏)。

11月には地鎮祭が行われる。この頃
コンストラクション・マネージャーと
して、天理の棟梁の住吉寅七氏と西田
実氏(土木工事)が参画する。そして、
フジタ工業が、構造設計、設備設計を
担当することになる。

昭和59年に入り、工期というタイム
プレッシャーがアレグザンダーの双肩
にのしかかってきた。直営に固執する
アレグザンダー、工費と工期の調整を
必死に模索する。この時期に概略では
あるが積算リスト、工程表、が提示さ
れる。

3月初めにアレグザンダーは、設計
チームを二つに分けることを指示する。
小田切氏を中心とする図面チーム、住
吉、西田、ナイス、中埜の4氏の施工
チームである。この直後、小田切氏は
CESを去る。同氏以前にもいく人かの
日本側建築家スタッフが加わり、そし
て去って行ったと言う。

現地では、西田氏を中心にした直営
方式で造成工事を行う。「池を掘って水
が張られたのを見てから、建物の詳細
を決めたい」というアレグザンダーの
意向から、池の掘削が行われる。

実質的な請負への移行で激しい対立が

4月末の私学設置審議会で、審議保
留となったこと、また建築確認の遅れ
などが工期を圧迫する。このため、7月
にはフジタ工業が請負うことになり、
直営方式は挫折する。絶対条件の60年
4月開校のためにはやむを得ない、と
いう学校側の決断であった。これを期
に、アレグザンダーが日本に居ること
も少なくなった。

アレグザンダーの建設方法は、ゼネ
コン方式とは全く異なる。建設途中で
様子をみながら変更を加えていく手法
である。しかも、図面は人間の感情の

伝達を妨げるという理由で、模型による設計が続き、最終の形状が明確にされない。片やゼネコンは、図面をもとに見積もりを行い、工程計画を練る。両者の対立は必然であった。

「ナイスにはこれだけの規模の建物をまとめるだけの判断力はない。その下に経験のない若い連中がついてやっている。直営当時の業者が逃げてしまったのも当然だ」と、フジタ工業の藤田敏美所長は工期の短かさと、見通しのない設計に、いらだちを隠せない。

「我々が現場に来た時、図面はポンチ絵しかなく、現場には池が掘ってあった。近くに建物が建つわけで、こんな地盤を痛めるようなことは、常識では考えられない」と続ける。

フジタ工業は、池を埋め戻し、ポンチ絵をもとに施工図を起こす。また、木造を鉄骨造に、コンクリートブロックを鉄筋コンクリート造に、それぞれ変えたらどうか、雨仕舞いはこの方がよいのでは、等々、性能、施工性を考慮しての提言をする。

「画龍点睛を欠く」結果に

これらゼネコンとしては良かれと思っていたことも、アレグザンダーには、同氏の方法論の否定と映る。「フジタが仕事を“はがいじめ”にして、我々を普通の建築家と同様に扱った。端に寄ってなさいとか、図面をよこせ、フジタが建てるとか言ってきた。ひどい経験だった」と、アレグザンダーはふんまんやる方ないといった様子。

現場の打ち合わせ会として、学校側、CES、フジタ工業で構成する建設委員会が設けられる。この会議、ゼネコン側から見るとこんな感じのものだ。「打ち合わせはけんかの場だ。職方、元請け、設計者がしょっちゅうもめる。設計者がコストと工程のことを全く考え



多目的ホールの内観。曲がり材を用いた木造小屋組み、白い塗り壁、大谷石の床仕上げなど、清楚な感じは教会を思わせる



多目的ホールを挟んで特別教室棟がある。それらは、列柱に支えられたアーケードにより結ばれる



ホームルーム回り。当初案はコンクリートブロック造であったが、現在は鉄筋コンクリート造。塀やベンチなどのしつらいが未完成という



池越しにホームルーム群を見る。地形に合わされて、微妙に高低差がある



教室内部。板張りの床と小割りの木製建具が特徴的。椅子、机も当初は、木製の特注品であった

独自の建設プロセスから 自然発生的な建築群が

界 workspace
難波 和彦

近年、近代建築についての反省が多く、立場から叫ばれている。その中でアレグザンダーの試みは、最も幅広く体系的な運動と見ることができる。設計、施工、さらにはユーザーも含めて建設プロセスそのものの改革を目指している。

盈進学園では、軋轢（あつれき）がずいぶんあったようだ。「あれはつぶれた」といううわささえささやかれた。原因は、工期とか法規とか実務的なこ

ともだろうが、基本的にはアレグザンダーの考え方と日本の現実のズレということだろう。

いきなり、経験のない日本でゼロから始めたわけだが、規模とCESの能力を見合わせると、3年という期間は短か過ぎた。せめて10年ぐらいは必要だったのではないだろうか。

建設された建物を見ると、いわゆるポスト・モダン風である。しかし、単にデザイン上の問題ではなく、配置のされ方、空間構造に見るべきものが多い。背景となる方法論が全く異なるからだ。種が植えられ、自然に発生してきたような建物群は、自分の経験を投影するのではなく、ユーザー、施工をも包括的に組みこんだ建設プロセスによるものである。（談）

ない。簡単に設計変更する。工事には手順があり準備に時間がかかることを分かっていない」（藤田所長）。

反近代を指向する設計者、近代合理主義を旨とするゼネコン、両者の取り合わせはあまりに不幸な事態であった。

アレグザンダーはことし2月に来日した時、建ち上がりつつある建物を見てこう述べている。「極端な短工期のなかで、超人的な努力で作業していただいた職人の方々には深く感謝している。そして、計画自体も80%は成功したと思う。しかし、実現しなかった残りの20%は大変、大切なものであり、ミステリアス・ソウル（不可思議な精神）とでもいうべきものだ。“画龍天晴を欠く”という思いで、非常に残念だ」。

アレグザンダーの意図した建設は終了しないまま、盈進学園東野高校は4月14日開校した。

アレグザンダーは、この盈進学園計画での経験を「闘争」（Battle）というタイトルの本にまとめるという。それはいったい何との闘争なのか。ユーザーなのか、法規なのか、それともゼネコンなのか、あるいは近代社会全体であるのか。いずれにしても、「近代」の建築生産体制を根本的に否定するアーキテクトビルダー、アレグザンダーの行く手には「近代」との全面的な対決のほかには道はないのだろうか。

遠く離れた異国の地での建設、大き過ぎた規模、短か過ぎた工期、などなど、多くの複雑な条件は問題の本質を不明確にしてしまった感じがある。しかし、アレグザンダーが徹底的に闘ってまで守ろうとしたものは何であったのか。闘いが終わり、のどかな田園風景の中に建つキャンパスに、もう一度ゆっくりと考えてみるべきものが残されているような気がする。

（白石 俊彦）